

## ヒガンバナは身近なのに触らない

里草会顧問 福井正樹

小学校の低学年の頃、♪赤い花なら曼珠沙華、と歌っていたが、曼珠沙華がヒガンバナのことだとは知らなかった。♪濡れて泣いてるジャガタラオイモと続けていて、大人に笑われたが、ジャガイモが雨に濡れているくらいな連想だから、歌の意味や叙情など分かっていない。でも曼珠沙華には暗い想像をかき立てられていた。

ヒガンバナは律儀に秋の彼岸の頃に必ず花を開いてくる。天候によって不揃いのこともあるが、普通はみんな一斉に花茎を伸ばし特徴のある花をつける。子供のころは「シビトバナ」と呼んでおり、墓や死人を連想してあの花の赤い色を毒々しいと感じて近寄らなかつた。それに子供同士で戒めあっていたことでは「ヒガンバナを家に持って帰ると、家が火事になる」ということだった。だから子供のころこの花を手折ったこともしげしげと眺めたこともない。

子供仲間で戒めたりタブーにしていたことは、最初は大人が教えたかもしれないが、なかなかよくできていたと思う。「蛇を指差したらその指が腐る」というのは、マムシなどは赤外線に感応して噛みつくそうだから、指を近づけるのは危険だ。「あっ蛇」「どこ、どこ」「ほれそこに」と指し示すと、誰かが「蛇を指差したらその指が腐る。誰かに咬んでもらい」と言って、その指を軽く噛むと腐らないことになっていた。

「玄関の敷居を土足で踏むのは、その家の主人の額を踏むこと」と戒めていた。しょっちゅう踏んでいたらすり減ってくる。必ず玄関の敷居は踏まないでまたぐことに、村の子供たちはしつけられていた。「川に小便したら家が流される」というのも、飲み水を汚すな、という意味もあったかもしれないが、昔から金肥として屎尿を大切にしていたことを思うと、「もったいない。畑の土の肥やしになる」と教えていたのかもしれない。同じ小便をするにしても、自分の畑の茶の木の根元にすれば肥やしになる。

さてヒガンバナの話に戻すと、初夏のころ朝食後しばらくして、家族全員が吐いたことがあった。なぜか変な感じがしてむかつき、食べたものを吐き出してしまったらすっきりした。口を漱いだら何の不快感も残らず、ただ驚いたことがある。後で祖母が、味噌汁に玉ねぎに混じってヒガンバナの球根が入っていたといていた。

ヒガンバナは、他の草が枯れている真冬に、濃い青に白い筋のつやのあるある厚めの葉を群がって出している。5月頃には良く育った球根が押し合うように、山田の土手に盛り上がっている。その中の転がり落ちたのがタマネギと混ざっていたのであろう。

私も数年前夕食にニラを摘んで卵と傷めた。一口食べたら苦くて吐き出した。ニラは勝手ばえで畑のいたるところに葉を伸ばしているのだが、そばにあったタマスダレの葉が一本混じっていたらしい。ある老人養護施設でスイセンの葉をニラと間違えて食事にだし、中毒を起こしたという記事もあった。

ヒガンバナを家に持ち込むと、何かの拍子に混じって調理することもあるかもしれない。

それが「ヒガンバナを家に持って帰ると家が火事になる」という子供同士の戒めになっていたのであろう。家で体験したように、何らかの原因で食べ物に紛れ込んでひどい目に遭った経験から、子供同士の戒めになっていたと思う。

だがこのヒガンバナはその後いろいろ知識を持ってくると、不思議な存在だと思ふようになった。まず植物の花は、「花粉を媒介する昆虫などを誘引するために、目立つように咲くのだ」という定義から外れている。ヒガンバナやオニユリなど目立つ花をつけるが種はできない。わざわざ花を咲かせても子孫を増やす役にも立たないのなら、そんなエネルギーを使わなくてもいいのではないか。しかし毎年秋の彼岸の頃には花梗を伸ばし目立つ花をつける。この花は予断を持たずに観察すると、なかなか見事な構造だ。白い色や黄色のものもあるらしく、園芸品種として十分鑑賞に耐える。私はあえて彼岸の前に草を刈っておき、ヒガンバナの群がり咲くのを目立つようにして、眺めている。

では種のできないヒガンバナが田の畦や土手に大量に育っているということは、人が移植したと考えられる。水田の稲作栽培とともに持ち込まれたのだろうか。何のために意識的に大量に育てているのだろうか。冬に伸びた肉厚の葉は、牛の草としては利用できない。葛城山の裾の田のあぜなどには見事に彼岸花が咲いている。冬に出た葉は、春先まで残っているので、踏込温床を作る時にはちょうど肉厚の葉が役に立つ。春早く畑の一角を掘り下げ稲わらなどで四角く囲い、その中に草や堆肥などに糠などを混ぜて踏み込むと発酵し発熱してくる。油紙などを張った障子などでふたをし、この温床でカボチャやキュウリなどの苗を育てていた。サツマイモなどはここに伏せこんでおくと芽が伸びて蔓を伸ばしてくるので、それを切って畑に定植した。今のように簡単に種苗が手に入らない時代には、各農家が温床を作りこの発酵熱を利用して苗を育てた。

またヒガンバナの球根を「備荒食料」として育てておき、飢饉のときにはこの球根から澱粉を採集したのだという。10年以上前に伊賀地方のあるグループが、ヒガンバナを食べる試みをすると地元のミニコミ紙に出ていた。たまたまその後このグループのリーダーと合ったのでその結果を聞くと、研究所で分析してもらったら有害成分が残っているということでやめたそうだ。きれいないい澱粉がとれたらしい。敢えて有毒成分があると言われたのでみんな食べなかったということだ。子供のころ食べて吐いた経験からすると、精製すれば食べられるのではないかと思う。

備荒食料としては、ソテツの実なども食べたようだ。激しい飢えのさなか、十分な時間をかけて精製しないで食べると体がむくんできたという。でもドングリなども飢饉の際には食べたこともあるようで、ヒガンバナの澱粉も飢え死にするほど食べ物のない時には食べられるのだろうと思う。

別な見解として、有毒なのでモグラなどから田のあぜを守るために植えてのだということも聞いた。子供の頃シビトバナと呼んでいたのは、ずっと昔土葬の墓を野獣などに掘り返されないために球根を植えたのだともいう。踏込温床にその葉を利用したのも、野鼠などに荒らされないように忌避する効果を持っていたのだろうか。